様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３２４０６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２５３９

研究課題名（和文）啓蒙専制期ハプスブルク君主国における知的公共圏の政治的機能の研究

研究課題名（英文）Political Functions of the Intellectual Public Sphere in the Habsburg Monarchy during the Age of Enlightened Despotism

研究代表者
上村　敏郎（Uemura, Toshiro）

獨協大学・外国語学部・教授

研究者番号：２０６２４６６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　コロナ禍の影響により、予定されていたすべての史料調査を実施することはできなかったが、収集した史料を分析し、その成果として5本の論文を発表した。また、2019年の国際18世紀学会をはじめ、合計5回の学会発表を行った。
　啓蒙改革期における知的公共圏では、政府のメディア戦略も行われていたが、公共圏で流通していた啓蒙言説は医療分野にも一定の影響力を持っていた。また、民衆啓蒙やハプスブルク君主国に新たに編入されたガリツィアにおける啓蒙においても、これらの言説は一定の効果を持っていたと考えられる。さらに、秘密結社のネットワークがこうした言論活動の背後に存在していたと推定することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、啓蒙専制期のハプスブルク君主国における権力と言論活動の関係を明らかにすることを目指したものである。具体的には、ハプスブルク君主国の言論活動がドイツ語圏全体の知のネットワークにどのように接続し、政治的役割を果たしていたかを検証した。無神論などの過激な啓蒙思想が出版ネットワークや秘密結社、宗派ネットワークを通じて広がり、政府がそれを取り締まろうとする動きを明らかにした。本研究の成果は、現代のメディアと権力、検閲に関する課題を考える上でも重要である。

研究成果の概要（英文）：Due to the impact of the COVID-19 pandemic, it was not possible to conduct all the planned archival research. However, the collected materials were analyzed, resulting in the publication of five papers. Additionally, a total of five conference presentations were made, including at the 2019 International Society for Eighteenth-Century Studies.

In the intellectual public sphere during the Enlightenment reform period, government media strategies were also implemented. The Enlightenment discourse circulating in the public sphere had a certain influence on the medical politics. Furthermore, it is believed that these discourses had a certain effect on popular enlightenment and the Enlightenment in Galicia, which was newly incorporated into the Habsburg Monarchy. Additionally, it can be assumed that the networks of secret societies were behind these discursive activities.

研究分野：西洋史

キーワード：ハプスブルク君主国　秘密結社　公共圏　出版メディア　社会的ネットワーク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるウィーンの書籍商の社会的ネットワークの構造を把握し、ウィーンを中心とした啓蒙専制体制下の政治的公共圏の実態を明らかにする研究をおこなってきた。啓蒙専制期の政治的公共圏を考える上では、いわゆる君主主導の「上からの啓蒙」と知識人をはじめとする「下からの啓蒙」が交わり、緊張が生み出される場である出版物が重要になる。

先行研究が明らかにするとおり、啓蒙専制期の検閲緩和によって生じた「パンフレットの洪水」現象は、多くの政治的著作を生みだし、啓蒙君主ヨーゼフ 2 世の改革とともに、多くの知識人や官僚層の政治的価値観に大きな影響を与え、その後のハプスブルク君主国におけるジャコバン派運動の源流の 1 つにもなっていた。こうした中で、ハプスブルク君主国における啓蒙という情報流通を把握するためには、検閲緩和の時期に禁書を含む政治的パンフレットを大量に出版していたゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーについて詳細に研究する必要があると考えた。

２．研究の目的

今までおこなってきた研究をふまえて、2 つの点に注目した。第一にドルバックやバールトなどのいわゆる急進的啓蒙主義者たちの書籍をハプスブルク君主国に拡散するのにウィーンの書籍商ヴーヘラーが大きく関与していた可能性である。第二に急進的啓蒙のネットワークとプロテスタントのネットワークが重複している可能性である。この 2 つの点を明らかにすることを目標に、本研究では、ヴーヘラーをはじめとする出版業者の出版ネットワークやドイツ・ユニオンなどの秘密結社ネットワーク、プロテスタント宗派ネットワークの関連性を解明し、急進的啓蒙思想のハプスブルク君主国における流通過程を史料的に裏付けながら、こうしたネットワークを基盤とする知的公共圏が政治的にどのように機能していたかを検証し、啓蒙専制体制下における権力と言論活動の関係を問い直すことを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、研究目標を達成するために、ヴーヘラーの社会的ネットワークの復元を①出版ネットワーク、②秘密結社ネットワーク、③宗派ネットワークという観点から試みた。

当初、史料調査として、オーストリア、ウィーンの各文書館において、特に問題が政治的に表面化したフランス革命勃発後、革命戦争期の警察文書、皇帝への報告書、知識人、出版業者の書簡などを調査し、分析しようと考えていた。

しかし、2020 年以降、コロナ禍によって文書館調査が困難になり、予定していた史料調査を全て実施することができなかったため、オンラインで取得できるものなど、可能な範囲で史料および文献収集をおこない、これまでの研究活動で収集した史料や文献と合わせて分析する作業をおこなった。

４．研究成果

まず、主に 2018 年、2019 年というコロナ禍前に実施できたものが中心となるが、史料調

査について総括しておきたい。2018 年にはウィーンのオーストリア国立文書館、帝室・宮廷・国家文書館（Haus- Hof- und Staatsarchiv）所蔵の機密文書および皇帝フランツ文書を重点的に調査した。特に 1790 年代の史料を中心に撮影した。インスブルック（オーストリア）にあるティロール州立文書館では、検閲文書について調査をおこなった。バーデン=ヴュルテンベルク州立文書館の本館シュトゥットガルト州立文書館、分館ジグマリンゲン州立文書館（ドイツ）でウィーンの出版者ヴーヘラーについての史料調査をおこなった。2019 年には、ベルリンのプロイセン文化財枢密国立文書館（Geheimes Staatsarchiv Preussischer Kulturbesitz）で秘密結社ドイツ・ユニオン関連の史料を中心に蒐集し、ウィーンでは帝室・宮廷・国家文書館で警察業務担当の国務大臣ペルゲンとその他の閣僚との書簡史料などを蒐集した。

こうした史料蒐集や分析の結果、いくつかの研究成果を学会や学会誌に発表することができた。以下主要な論文に絞って成果を総括する。

『史境』79/80 号に発表した「マリア・テレージアのハンガリー王戴冠式と虚構報道」（2020）では、メディアと政治文化の関係を解明するために、少し時代を遡って、マリア・テレージア治世当初の戴冠式の儀礼とその報道が公衆に与えた影響を検証した。この研究では、実際に事件が起きる現場の公共圏と出版報道で展開されるメディアの公共圏を区別し、両者の食い違いに宮廷のメディア戦略を見いだし、公共圏における王権によるイメージ形成力の強さを確認した。

『東欧史研究』44 号の「啓蒙改革期ハプスブルク君主国の公衆衛生―医療ポリツァイと民衆啓蒙―」（2022）では、医療ポリツァイと民衆啓蒙を通じて、国家がどのようにして公衆衛生を管理し、民衆の健康意識を向上させようとしたかを分析した。啓蒙改革期には、都市部と農村部で異なる形態の医療啓蒙活動が展開された。都市部では、医療ポリツァイが健康を市民の義務として扱い、都市民の健康観を紀律化しようとした。一方、農村部では、印刷メディアを利用した民衆啓蒙が行われ、宗教の力を借りて健康に関する知識が広められた。具体例として、ザムエル・ザックスの『賢い農民、あるいは農民農夫のための本』が挙げられる。この書物は、農民の日常生活に合わせた実用的な健康知識を提供し、宗教的価値観と啓蒙的価値観を融合させたものであった。この点で興味深いのは、この『賢い農民』がゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの下で出版されている点と、著者のザムエル・ザックスがルター派の牧師であり、また秘密結社ドイツ・ユニオンの会員であった点である。こうした意味で、本研究課題が目的としていたヴーヘラーの 3 つのコミュニケーション・ネットワークが交わる部分にザックスを位置づけることが可能である。より詳細な研究には、追加の史料調査が必要となるだろう。

『社会文化史学』67 号に掲載された「18 世紀末ハプスブルク君主国におけるガリツィアの啓蒙――ガリツィアをめぐる啓蒙知識人の眼差し――」（2023）では、ポーランド分割でハプスブルク君主国に編入されたガリツィアという地域について啓蒙知識人がどのように捉えていたのかを分析した。啓蒙期のガリツィアは後進的と見なされ、文明化の対象とされた。啓蒙改革の一環として、農民保護政策、教育政策、植民政策が実施され、特に農民の状況改善が目指された。こうした中で啓蒙知識人たちはガリツィアを「東欧」の一部として認識し、オーストリアの中心から見て周辺地域とみなした。この地域は同時に、新天地として移住者を引きつけるフロンティアでもあった。ガリツィアの啓蒙政策は、ドイツ系の農民や職人の植民を通じて進められ、地域の発展が試みられた。しかし、現地の農民の理解や領主の抵抗など、改革の実現には多くの課題が存在した。ガリツィアに関する出版物や知識人の

言説は、この地域の後進性を強調し、文明化の必要性を訴えるものが多かった。例えば、1786 年に出版されたフランツ・クラッターの見聞録『ガリツィアの現況に関する手紙』では、ガリツィアの文化や社会状況が描かれ、文明化の必要性が示された。また、ヨーゼフ 2 世自身もガリツィアの視察を行い、その印象をマリア・テレージアに報告している。啓蒙知識人たちのガリツィア観は、ヨーゼフ期の政策と密接に関連していた。彼らはガリツィアを改善可能な地域と認識し、自らが啓蒙を主導しようとした。しかし、啓蒙の努力が必ずしも成功したわけではなく、19 世紀半ば以降のガリツィアの評価には啓蒙の挫折が影響を与えていた。啓蒙改革は均質化の努力が挫折すると、ガリツィアの後進性を本質的なものとして認識するようになった。

最後に『東欧史研究』46 号掲載の「酒場は大学、教会はクラブ―18 世紀末ウィーン郊外における職人たちの公共圏と啓蒙のネットワーク―」（2024）では、ウィーン郊外の職人たちがビール酒場や教会を通じて啓蒙思想を受け入れ、議論の場として活用した様子を描きながら、こうした職人たちのネットワークに秘密結社ドイツ・ユニオンの関与があった可能性を検証した。1794 年に密告によってビール酒場「煙突掃除夫亭」でジャコバン主義的な発言をしていた職人たちは逮捕され、啓蒙的聖職者の影響を受け、無神論的な宗教観を持っていたことが判明した。事件に関与した聖職者や職人たちのリーダー的存在であった靴屋の親方は、ドイツ・ユニオンという秘密結社のメンバーであり、ドイツ・ユニオンの創設者バールトの書物やフランスのドルバックの『自然の体系』が読まれていた。この職人たちの公共圏の形成には、出版者ヴーヘラーの 3 つのコミュニケーション・ネットワークが影響しているように見える。

以上のように、ヴーヘラーをはじめとする出版業者の出版ネットワークやドイツ・ユニオンなどの秘密結社ネットワーク、プロテスタント宗派ネットワークの関連性を解明する過程で、それぞれのネットワークがある程度重複している事例を発見することができた。ただし、これを一般化するためにはさらなる史料調査が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 上村敏郎	４．巻 46
２．論文標題 酒場は大学、教会はクラブ―18世紀末ウィーン郊外における職人たちの公共圏と啓蒙のネットワーク―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 東欧史研究	６．最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上村敏郎	４．巻 67
２．論文標題 18世紀末ハプスブルク君主国におけるガリツィアの啓蒙――ガリツィアをめぐる啓蒙知識人の眼差し――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 社会文化史学	６．最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村敏郎	４．巻 80
２．論文標題 マリア・テレージアと天然痘-ハプスブルク君主国における天然痘予防接種の実施	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ドイツ学研究	６．最初と最後の頁 36-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上村敏郎	４．巻 44
２．論文標題 啓蒙改革期ハプスブルク君主国の公衆衛生-医療ポリツァイと民衆啓蒙-	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東欧史研究	６．最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上村敏郎	４．巻 79/80
２．論文標題 マリア・テレージアのハンガリー王戴冠式と虚構報道-塗油儀礼におけるイメージ形成	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史境	６．最初と最後の頁 125-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 上村敏郎
２．発表標題 18世紀末ハプスブルク君主国における啓蒙知識人のガリツィア観
３．学会等名 東欧史研究会・ハプスブルク史研究会合同個別報告会
４．発表年 2022年

１．発表者名 上村敏郎
２．発表標題 啓蒙改革期ハプスブルク君主国の公衆衛生-医療ポリツァイと民衆啓蒙
３．学会等名 東欧史研究会2021年度大会「近代社会における身体の管理」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Toshiro Uemura
２．発表標題 Identity as a King/Queen of Hungary: Political Fictionality in the Coronation of Maria Theresia in Hungary
３．学会等名 ISECS（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 上村敏郎
２．発表標題 マリア・テレージアのハンガリー王戴冠式における虚構報道
３．学会等名 東欧史研究会・ハプスブルク史研究会2019年度合同報告会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関